

ジャン (Kusan) と謂ひ、漢で大月氏といふ稱呼の對象が同一であることは勿論のことであるのみならず、貴霜王家なるものは甘肅から西遷した月氏種族の王家であると解すべきが如くである。今その本文を引用して見ると、

大月氏國居藍氏城。西接安息四十九日行。東去長史所居六千五百三十七里。去洛陽一萬六千三百七十里。

戸十萬。口四十萬。勝兵十餘萬人。初月氏爲匈奴所滅。遂遷於大夏。分其國爲休密・雙靡・貴霜・盼

頓・都密凡五部翎侯。後百餘歲。貴霜翎侯丘就卻攻滅四翎侯。自立爲王。國號貴霜王。劉攽曰案文多一王字 侵安

息。取高附地。又滅濮達・罽賓。悉有其國。丘就卻年八十餘死。子閻膏珍代爲王。復滅天竺。置將一人

監領之。月氏自此之後最爲富盛。諸國稱之皆曰貴霜王。漢本其故號言大月氏云。

と見えて居る。月氏が大夏に遷つて、其の國を分つて五部の翎侯〔領〕としたといふのであるから、その翎侯即ち將軍は月氏の人であつたと見ることに於て無理はない。西洋の東洋學者は早くからこれらの月氏・貴霜等の問題について興味を感じ、その攷究の結果を發表した人が多いのであるが、これらの人々は悉く貴霜王家を月氏種族の家として少しも疑つてゐない。尤も一八八三年にスペヒトが「漢史に據る中央亞細亞の研究」といふ論文を發表した時までは、これらの人々の據としたのは馬端臨の文獻通考の類に過ぎず、而して文獻通考の四裔考大夏の條は、史記・漢書・後漢書の大夏に關した記事を集めて作り上げたもので、五部の翎侯に關しては、後漢書の記事に従つて、月氏が大夏に遷り、「分其國爲五部翎侯」と書いて居るのであるから、これらの人々が此の如く解釋して居つたのに不思議はない。併しながらスペヒトの論文が出で、その後にも西洋の學者の間に、直接三史の月氏・大夏・貴霜等に關する記事を譯述した人があつたにも拘はらず、この考が依然として微動だもしてゐないのは、寧ろ不思議